

菅江真澄の遊覧記をユネスコの世界記憶遺産に

酒井 董美ただよし



真澄の描く男鹿半島のナマハゲ

後（仙北市）で亡くなるまで二十七年間を過ごしている。

石井正己氏（東京学芸大学教授）は、菅江真澄の遊覧記をユネスコの世界記憶遺産に登録すべきだと主張する。

真澄は二百年前に各地の人々と交流を重ね、さりげない暮らしや習俗を文章や三〇〇〇点以上も図絵化した記録は、全世界にも見当たらないからだという。右のナマハゲは、真澄の描いたもの一つで実際はカラーであるが、石井教授の著書『旅する菅江真澄 和歌・図絵・地名でたどる』（三弥井書店）の五十一ページに掲載されたモノクロ写真を転載したため、単色なのである。

筆者は昭和四十五年七月二十六日に松江市美保関町七類で森脇キクさん（明治三十九年生）から、次の「鉦取られ物語」なる昔話を聞いているが、それは菅江真澄の著書『はしわのわか葉』に出ている語り物「鉦取られ物語」が、ここ山陰では昔話に変化したものだと思っている。

「ほとんど昔があつたげな。／とんと隣の唐六左衛門が鉦を借りに行きたげな。／ついたちの日に went たら、「ついでいもどいた」。／ふつかの日に went たら、「不都合なことばかり言わさる」。／みつかの日に went たら、「見たことあるきたら、「いつのこと、疾うもどいた」。／むいかに went たら、「無理なことばかり言わさる」。／なのかに went たら、「何のことだか」。／ようかに went たら、「よもよも（本当に）よう来たなあ」。／ここのかに went たら、「ここにはにや（無い）。／とうかに went たら、とうとうもどさだつた。／そつで昔こつぱり。」



「鉦取られ物語」の舞台となった松江市美保関町七類（筆者撮影）

菅江真澄のおかげで当地の語りもその古さが証明された。石井教授のユネスコの世界記憶遺産登録の主張に大いに賛同する筆者なのである。（元島根大学法文学部教授）